

## < 編集後記 >

学問研究において情報技術の活用が深化しつつある。本号の記事の話題も、グリッドコンピューティング、シミュレーション、地球流体力学、物質科学、安否確認と多岐にわたっており、編集委員の一人として今後も情報技術を活用した学問研究を積極的に取り上げていきたいと考えている。

振り返ってみると、1980年代に始まった情報革命により、すべての学問は情報技術の活用なしには成り立たない状況まで来ているといえよう。その結果、学問を支援するための主要な情報サービスは、スパコンに代表されるコンピューティングサービスから SINETやキャンパスネットワークに代表されるネットワーク接続サービスに移行した。そして、現在では、ADSL・FTTHや高速無線LAN、携帯電話等の普及により、ネットワークを活用し学問を支援するアプリケーションサービスの充実が求められ始めており、ネットワーク接続サービスの上位に位置する次世代学術情報基盤の構築と運用が急務になっている。しかも、その情報基盤は、すべての学問分野で広く利用できる「共通性」が求められるだけでなく、学問分野の多様性を育むことができる「柔軟性」を有する必要がある。さらに、24時間365日運用できる「可用性」はもちろん、情報技術の進展やニーズの深化、学問の発展に対応できる「持続的開発可能性」も求められる。これらを実現するためには、情報基盤を提供する大学や部局などのサービスプロバイダーだけでなく、サービスを受取る研究者・教育者・学習者などのサービスコンシューマも各学問分野を対象としたアプリケーションサービスの研究開発・実装・運用に参加可能な次世代学術情報基盤が必要である。

その期待に応えられる次世代情報基盤の研究開発や実サービスの最新動向についても、今後、センターニュースで取り上げられたらと考えている。

(S.K.)